
一部50円です



たいっちゃん

彼の住む家は我が家から谷間の細い道を半時間ばかり登った山あいにあった。辺りには二軒の廃屋があるだけで、人が住む家はたいっちゃんの家だけだった。自給自足に近い村の生活であったから、どの家も貧しかった。とりわけたいっちゃんの家暮らしぶりは質素そのものであったが、のどかな

自然の中で育ったたいっちゃんは、限らない優しさをたたえていた。

私は気の弱い性質で、村の中で遊び友達を誘うことに臆するところがあったが、たいっちゃんに対してだけは違った。遊びに誘うため、わざわざひとり山道を歩いてたいっちゃんの家まで行ったのである。彼は、私より一つ年上であったが、偉ぶることもなくゴンタをすることもなかった。彼は私以上に弱気でおとなしく、物足りなく思うほど従順であった。そんな彼に、子供ながら私は優越感を感じていたのかもしれない。彼の暮らしぶりや穏やかな性格に対して、劣等感の強かった私は安心できる居心地のよさを感じていたのだろう。

小学生になったころ彼の家は山奥から村に引越してきた。鉄道の陸橋を見張る橋番小屋として建てられた小さな家が空き家となっていて、そこに越してきた。私は、たいっちゃんの家が近くになった事もあって毎日のように遊びに行った。不思議に、たいっちゃんが私の家に誘いに来る事はなかった。いつも私が出掛けていくのである。

都会に暮らすようになって、競争社会の中でもまれ劣等感を感じる間もなくあくせく暮らす羽目になった。そんな都会生活でも、たまに質素な身なりで穏やかな表情を持つ人に出会うと、たいっちゃんのことを想い浮かぶのである。そして、善良でおとなしい人をどこかでバカにし、出し抜いてでも成功してやる、と大学まで進んだが、そんな性根が間違っていたのではないかと思う。競争に勝てなくても、やさしい穏やかな心こそが大事だったのではないか。たいっちゃんは、中学を出ると左官の見習として京都に就職していった。それっきり会うことはない。

今でも思い出す。夏の昼下がりに、親たちが昼寝をしているとき、家をぬけだし、ひとり山道を歩いて、たいっちゃんの家に行く。家の下から「たいっちゃん！ 遊ばか」と声をかけた。かまびすしいセミの声の中しばらく待っていると、たいっちゃんが家から出てきた。「よっちゃんかあ」と言いながら下りてくる。私は谷の流れを見ながら「やまごを釣るか」と誘うと、たいっちゃんは返事をすることなく穏やかに笑っていた。

連載 爺捨て山 40

梵店主

この欄で私は、病院では死にたくない、と幾度も書いてきた。ところが、先日、阪大病院で十万人に一人だという難病、多発性筋炎と診断された。膠原病の一種で筋肉が衰えていく原因不明の病気であるらしい。

すぐに死ぬか、長生きするかは分からないが、すくなくとも古い先不透明な人生になったことだけは確かである。

今、考えている事は、薬づけの医者べったりという生き方はしたくないということである。生死においても、治療においても自分の意思で決めるスタンスは変更するつもりはない。

医療を拒否するわけではないが、病院任せ、医者まかせのやり方はしたくない。しかし、こんな私の身勝手にまわりの人が付き合ってくれるとも思えない。

なかなか難しい判断を求められるだろうが、なんとか自分の思い通りの生き方を探して行きたい。

老人医療費が削減され、わざわざ爺捨て山を作らなくても、日本中が爺捨て山になる日も来るのかもしれないが、わが理想の爺捨て山をなんとかつくり、余生を十分に堪能して、医者にかからず自然の中で自分の死期のドラマを楽しむたい想いはつよい。

素直にありがとう

おそらく家でも、用事を頼まれる事がなく、自分流にやってしまうことが多い。だれでも、おそかれ早かれ、歳を取ってきて、自分の事を自分で出来ないう事がある。

その場合、相手にも気持ち良く動いてもらい、自分も何かしてもらった時に、「ありがとう」が言える気持ちになる為に、日頃から、ちよつとした事でも人に頼む練習をしておいたほうが良いように思う。

電車の中で、私もよくそんな場面に出会う。若い人がせっかく席を譲ってくれたのに

「すぐ降りますから結構です」などと云って、つり革にぶら下がっている人。では次の駅で降りるのかと思うと、その先、次々と通り過ぎ、電車がとまるたびに揺れに応じて、頑張って立ち続けている。若い人や親切な人が申し出てくれた時、私は遠慮なく「ありがとう。助かりますわ」と付け加えるのだが。

降りる時に、その人を探して一言礼を言う。それぞれの場に、良いところ悪いところ、どちらもあるが、高齢者や弱者に対する公共的なマナーというか、思いやりはまだまだ劣るのではないだろうか。

それを嘆いていても始まらない。高齢者サイドも、日頃から、ちよつとした事を人に頼むことに慣れて、頼み上手になつておく必要もあると思う。

エレベーター・ガール

誰もが夢中で人の列に従う。少し遅れたからといって支障をきたす事はないのだが。

「ご来店ありがとうございます」「乗り降りの際は、お足元にご注意ください」デパートでエレベーターに乗ると、聞こえてくるメッセージ。当たり前すぎて、気にもとめない人も多い。

その乗降口に立つて、包み込むような笑顔と深々としたお辞儀で客を迎え、エレベーターに不慣れた年配者には、そつと手をそえ、合間には、手すりも拭く。女性の花形職種であつたと思う。容姿端麗で条件が揃わないとダメ。

現代はサービス部門の女性社員らが立つが、多くの百貨店からエレベーターガールの姿が見られなくなった。百貨店といえども人件費削減となつたのか。

今のような時代だからこそ、お客さんと百貨店には人間的な触れ合いが必要ではないのか。移り変わる社会の中になると、しばしば、その変化には、みんな疎くなつてしまつてゐる。

どうも変だなあ…と思う事がある。この頃、命日とは関係なしに墓参りに足が

向いてゆく。死者に聞いてもらいたいと思つたら自然にその方向へ行つてしまう。

「夢で会いましょう」「墓地で会いましょう」という訳である。私は迷わずに墓参りにゆく。墓参りするのには、花や綿菓子だけ持つて、作法はいらない。静かに目を閉じて、心の中で自己紹介と子供二人の名前を言う。

そして死者の名前を呼ぶ。普段はそこにはいないはずの死者が、きつと戻つて来てくれる、と信じて。そして、聞こえてくる死者の返事を待つ私の姿がある。

現代は散骨や自然葬を望む人が増え、埋骨から年忌さえも知らされず、冷たくて暗くて狭い墓穴の中に閉じ込められて一巻の終わりとなる。よしあしは別として割り切れない気持ちが残る。

(死んだら風に生まれ変わる)

風や光や星、鳥になつて、更に生き続ける。では、風になつた死者は墓なんなんて不要なのか。私はそんな事はな

いと思う。むしろ必要である。

血縁者や親戚が墓参りに来たら、その時、死者は何処にいるの。つまりお墓とは、死者と生存者とのミーティングの場所と思つてゐる。夢ではなく、墓地で逢いましょう、というわけである。

俳句

土田 裕

楠老樹大緑陰となりて立つ
湯上りの酒のつまみや冷奴
梅雨めきぬ門灯いまだつきしまま
薫風に光はじける外湯かな
噴水の頂き常に宙にあり



『人気のデザイン』

着物から服を仕立てます

梵~ぼん~

最低年金生活の身でありながら、「家を
買う」なんぞとのたまわった、わが姉チ
ヤン。それどころやない事態に直面した。
そもそも、家を買うなんて無理もいいと
ころだったので、今回のことがなくても
「気は確かか、姉チャン？」と私は叫ん
でいたのだが。先月、義兄の腎臓にガン
がある、と判明し、7時間に及ぶ摘出手
術を受けたのだ。実際、家どこの話で
はない。

しかも！ 信じがたい話だが、その手
術を姉は義兄と二人だけの秘密にして、
私たちはもちろんのこと、息子夫婦にま
で一切、話さず、退院してから「実はな
と電話してきた。

良識派の皆さんは「家族に心配をかけ
たくなかったのだろう」と弁護してくれ
るかもしれないが、それは姉という人間
を知らないヒトのセリフである。

一部始終をお話するので聞いてほし
い。できれば、一緒に呆れてほしい。

話は春にさかのぼる。義兄は肺ガンだ
が、すっかり元気になっていようだっ
た。だが、手術で完治というタイプのガ
ンではなかったので、病院には定期的に
通っていて、そこで、「腎臓にごく小さな

しこりがある」と告げられた。ここまで
は、聞いて知っていた。「病院がいっぱい
で、ベッドの空きができれば入院して、

しこりを取って調べるらしい」と。

「取らな、わかれへんなんて」と姉は不満
そうだった。姉と電話でしゃべるたびに、
その話題が出てはいたが、「さあ、いつか
わからんなあ。病院次第やな」と冷たく言
い、「テレビとかに出ている有名人やった
ら、その人の都合に合わせて診てもらえる
んやろうけど、うっとこなんか、いつのこ
つちや、わかりやせんわね」とひがんでも
いた。

6月の初めに「検査入院ってまだな
ん？」と姉に聞いたときも「うん」とか言
っていたのだが、実はそのとき、義兄は入
院中だった。なんで、隠すのだった？ 姉
に都合があつたからだ。姉にとってT先生
の教えはこの世で一番、信じるにたるもの
で、その先生の開くセミナーに参加するこ
とは、姉の人生の最優先課題なのだが、た
またまそのセミナーの日程と、病院から
「ベッドが空きました。来週の月曜日から
入院して下さい」と言われた日にちが重な
ってしまったのだ。

セミナーは琵琶湖畔のホテルで、日、月、
火曜日までの3日間。言わせてもらえば、
姉はそのT先生のセミナーにもう何十回
も参加している。いっぺんぐらい、お休み
したからといって、誰にとがめだてられる
こともない。

しかし、姉は強引にも、夫とともに、セ
ミナーに参加する道を選んだ。日曜日の夕
方、セミナーの初日のスケジュールを終え

てから、二人で車でホテルを出て、家に
もよろしかろう。だが、義兄の手術は検
査なんかではなくて、7時間におよぶ大
手術だった。開腹はせず、お腹に穴をあ
けて腹腔鏡というのだろうか、内視鏡を
入れて切除するやり方だ。姉は「私も、
そんなに(時間が)かかると思つてへん
から、小さいおにぎりとかペラペラの本
冊しか持つて行つてなかつてんやんか。
でも、医者には『十分以上、家族控室を離
れないで下さい』と脅かされてん」と
『ええっ、あんなに元気そうやつた
たのに？』とみんなびっくりしてやつた
けどなく」と姉は他人事のように言うが、
それは常識的に考えてどうなんかな？ と
いうことである。

そのまま火曜日のセミナーを受けて、
姉は帰った。そして、その翌日が手術。
セミナーに行くことをどうせ反対され
る、それはうっとおしい、と思つていた
姉は手術も秘密にすることにした。セミ
ナーと病院を行ったり来たりした分、自
分も疲れているのに、お見舞いだなんだ
と来られるとゆっくり休んでもいられな
い。とくに、息子の嫁。息子一家の晩ご
飯の心配までさせられるより、ここは一
つ、退院までだまつといたる、と姉は考
えた。

「あなたにだけ言うわけにいかんやろ。
あなたに言うたら、シンちゃん(弟)と
こにも、あの子らにも言わなあかんよう
になるから」と姉。

「だってな、手術の後はICU(集中
治療室)に運ばれるやんか。しやから、
付き添うことはでけへんねん。だから、
病院に来ても意味ないから、明日は病院
に来る気はありませんねんけど、と看護
婦さんに(姉は今も看護師という言葉を
使わない)言うたつてんやんか」。私も
疲れてるしな、毎日、病院に行くことあ
りか？ 普通か？ でも、そしたら、すぐに、医
者が飛んできて、「では、今から説明しま
す」と言ってくれたらしい。姉は、「何

確かに、2、3日の検査入院ならそれ

もたいそうに明日に伸ばさんでもええわけやってん」とさらっと言っていたが、姉チャン、それは違うやろ！

医者の説明によると、腎臓のガンはもとから義兄の中にあつたもので、肺ガンからの転移ではなく、幸いに小さくて問題なくきれいに切り切れた。腎臓については心配いらなんでしょう、ということだった。ただ、悪性かどうか、病理検査の結果がでるまではしばらくかかります、と言われたらしい。

姉は「間違いなく悪性でしょう、って医者は言うてるのに、B型（義兄の血液型）って呑気でええよねえ（姉の妹である私もB型だ）。『検査の結果が出るまではわからないだよ、悪性か良性か、医者が見てもわからないんだって』とか言うてんねん、アホちゃうか、医者は何百回も手術してるねんで、悪性かどうかぐらい、見たらわかるがな」。悪性ではあつたが、二週間後、義兄は歩いて病院から家に一人で帰って来た。姉は「（近所の）駅までは車で迎えに行つたるつもりやってんけど」。小さな旅行用のスーツケースをガラガラと押しながら、義兄は駅から家までも歩いて戻つた。

義兄、生還。

その後、姉が電話してきたのだ。「悪い悪くせんといてな。実はもう、退院してん」。

ああ、姉チャン、そりやすべて姉んちの勝手ではあるが、何ともいやはやである。このイヤハヤ話、続きます。買いたいという家の話の続きもあります。いやはや！（AO）

わが沖縄考3

具志晩学

琉球古典組踊の創始者、玉城朝薫（たまぐすくちようくん）は江戸、薩摩に数度も上り、琉球の芸能を披露し、また日本の古典を見聞きた。朝薫芸術と能、狂言との繋がり深い。柳宗悦は前述の論文に、次のようにも書いている。

「私は沖縄の至宝玉城盛重翁の踊りを見て能よりも一段と深い感銘を受けました」

玉城盛重（せいじゅう）は戦前の代表的な琉球古典舞踏家、創作でも名を成した。琉球の団十郎と称された。

△音楽も日本とはまるでちがうvどころではない。岩中氏は、県民性の研究は暫く置いて、沖縄学の勉強をしてもいい。

氏は、沖縄についてかなりな偏見を持っていて。△小さいながらも、経済的にはもつと豊かな国になっていた

闘ス」

もしれないのである。vとは、東大卒にしては極めて不見識だ。△沖縄人をヤマト民族と同列に並べて論じること自体、そもそもおかしい話ということになる。v△最初から、別の民族の、別の国だと思えば、むしろちがっていて当たり前なのである。vとはまた非常識な発言だ。氏はヤマト民族に拘泥し過ぎないか。島国根性の典型だ。国粹主義的な感覚だ。

△沖縄として正式に日本の一部とされ△まだ130年しか経ってないのだ。vと言われるが、その130年、沖縄県民が、祖国のために果たした役割は見事なものではなかったか。

太平洋戦争、沖縄戦末期、大田実海軍中隊方面根拠隊司令官は、海軍次官宛に最後の電文を打った。絶望的な戦場での県民の献身、その悲惨な状況を詳細に述べ、

「一木一草焦土ト化シ 糧食六月一杯ヲ支フルノミナルト謂フ 沖縄県民斯ク戦ヘリ、県民ニ対シ後世特別ノ御高配ヲ賜ワランコトヲ」と結んだ。

また、戦時最後の沖縄県知事島田叡、沖縄県警察部長荒井退造、共に、あの戦乱の中、県民の安全のために死力を尽くし、斃れた。その前に東京へ打電した。

「六十万県民只暗黒ナル壕内ニ生ク此ノ決戦に破レテ皇国ノ安泰以テ望ムベクモナシト信ジ此ノ部民ト相俱ニ敢

素朴にして果敢なる県民の幾人かは、日本軍人に殺された。島田知事、荒井警察部長のような高潔な官僚が奮迅する一方、要領よく本土へ逃げた役人もいた。勇敢なる軍人も多く奮闘したが、沖縄県民を、△別の民族△と意識していた将兵もいたのだろうか。

柳宗悦は△琉球の富△の跋に書いた。「私達はここに琉球の驚く可き富の幾つかを数えました。（中略）ここに僅かばかり述べた事柄だけでも、若し琉球の文化的な富に就いて、読者の心を惹くことが出来るなら感謝の至りです。さうして其の数々の富の上に、沖縄の未来を建設することは、お互いの任務だと思えます。

琉球よ、栄あれ

昭和十四年中夏

この卓越した叡智が書いた六十数年前の名文に接すると、沖縄を△日本とはもともと別の民族、別の国vと、認識する日本人の存在を、私は黙過することとは出来ない。（終）



玉城盛重 (1868-1945)

takantの覚醒

—君は悲しみの人か？

山彦海彦

新潮文庫に『自閉症だったわたしへ I・II』と言うシリーズがある。著者の名はドナ・ウイリアムズ、1963年オーストラリア生まれ、女性。

題名の通り生まれながらの自閉症であつたにもかかわらず、治療法に偶然邂逅して自らを大幅に回復させた奇跡の人です。回復は中途ながら、その本では、元患者自身から自閉症という脳の混乱の中を生き抜いてきた記憶とその独特な精神世界が語られています。僕は精神科医でも臨床心理士でもないのですが、その精神世界の分析はできませんが。

その本の357ページから、ビタミン剤を買いに行った薬局でアレルギーに詳しい薬剤師に出会い、アレルギーの事を指摘され、適切な治療ができる医師を紹介されたことが回復への第一歩となったことが語られます。生まれてからずっと冷酷だった運命はやっと彼女に微笑みかけたのでした。

ドナさんはそれまで義務のように食べていたいくつかの食べ物を自らやめてみました。ジャガイモとトマトをやめてみると筋肉痛と関節痛がやんだ。

乳製品をやめると目のまわりの隈が消え、喘息も出なくなつた。そしてさかんに摂っていた白砂糖の量を減らすともなくなつた。これこそ食物アレルギーの発見だつたのです。

経済的に貧しかったのですが、ドナさんはオーストラリア国内でも数少ない食物アレルギーを判定できる、治療費の高い医師の診察を受けることにしました。そこで様々な食品に反応していることが判明した。保存食品に殆ど全てに使用されているフェノールやサルチル酸塩などの化学物質にも反応することが判つたのです。そして前に述べた機能性低血糖症の重い症状があることが判つた。

お金が工面できなかつたために治療を続けられませんでした。ドナさんは社会のコミュニティから遮蔽された自閉症の泥沼地獄から這い上がり始めたのです。

その後イギリスに渡り執筆を始めました。

環境医学や分子矯正医学の論文はアメリカやカナダ本国の学会誌には拒絶されたのですが、オーストラリアやニュージーランドでは取り上げられました。その余波が彼女に幸運を与えたのではないかと思います。

日本でもドナさんと同じような自閉

症の男性がいました。30歳半ば、関西の人で父親は京都で腕の良い料理人をしていたらしい。その両親も他界し天涯孤独の身だつた。専門の教育機関を卒業した後、何度も就職に失敗したのでしよう。道端に転がる犬の糞のようになり、道端として街角に行き倒れていたところを保護されたと語っています。

1年半前まで彼は関西のどこかで生活保護を受けながらアパートで孤独な生活をし、ブログを綴っていた。それが「takantの日記」でした。

自閉症はスペクトラムと言われます。症状が多彩かつ重症度も異なるのです。寝たきりで痴呆状態の重度の自閉症から、ある程度の社会的生活が営めるが意思疎通ができない高機能自閉症まで広がります。その重症度の境界線が引けないことと症状の多彩さゆえに、虹色・スペクトラムと呼ばれるわけです。中には非常に高い知能を示し、特異な才能を現わす人もいます。彼はそんなタイプの高機能自閉症だつたのです。今は消えてしまった彼のブログを読んでいた頃、その文才はドナさんに似ていると思いました。

彼はインターネットから自閉症の様々な治療法を検索して自ら試していた。ビタミン剤・ミネラル・食物アレルギー対策など。そして自閉症に様々

な代謝障害が関係していることにも関心を持って、銀杏葉エキスのサプリメントを試していました。

そしてついに彼は覚醒するのです。ある日の夕暮れ、だた習慣的に見ていた野球放送で、ある選手がインタビュウを受けている場面を見ていた時のことです。いつものようにただ画面が流れるだけで別段なにも変わった様子はありませんが、なぜか無機質で感情反応の無い彼の脳に、突然その選手の気迫が、感情が押し寄せてきたのです。

そのとき彼はたいへんうろたえたようですが、無理ありません。それが、生まれて初めて自分の脳で感じる事ができた他人の意志と感情だつたのですから。彼は自分で行ってきた治療や対策によつて脳が正常化し始め、初めて自分の人生に覚醒（生）したのでした。彼はまさに日本のドナ・ウイリアムズ、奇跡の人だつたのです。

彼の脳は、アレルギーの損傷や栄養欠損による脳の代謝障害から脱して正常化し始め、感情を理解し、相互理解のための意疎通を認識するようになったのでした。しかし彼は孤独すぎた。

人との繋がりはネットで彼の存在を知る僕を含めた数人だけだつた。彼は、今までの自分自身の存在の無益さと、人としてもう一度やり直さなければならぬことに絶望していたのです。

米国時代 7 (78年12月、84年1月)

土田 裕

デンマークの病院

デンマークは人口五五〇万人の小国であるが福祉が充実しており、幸福度では世界一といわれる。

ブリジストン・タイヤの代理店はデンマークのオーフスという町にあった。デンマークではコペンハーゲンに次ぐ第二の都市でユトランド半島にありドイツとは陸続きなのでハンブルグから車でも行けた。ブリジストンの商売だけを見れば、人口四千万人の西ドイツの倍以上の売り上げをあげていた。ドイツ向けが乗用車用タイヤしか売れなかったのに対し、価格が高いトラック・バスタイヤが大半を占めていたせいもあるが、ある時点から支払いが滞るようになったので現地調査を行ったところ一年分以上の在庫をかかえていることが分かった。結局はブリジストンと三井物産でその在庫を買い取り、現地販売会社を設立することになったが、今回はその話ではない。

一九七二年夏、コペンハーゲンへ家族旅行をした。長女はまだ二歳だったが短期の旅行だったので連れて行った。最初の晩、突然、長女が「ぎゃー」

と大声で泣きだした。ホテルの湯沸かし器で湯を沸かしていたところ、娘が触って熱湯が肩にかかり大やけどをしたのであった。あわててホテルに救急車を呼んでもらい救急病院へ連れて行った。幸いやけどは上半身の一部だけで顔は大丈夫であったが、一晩娘だけが病院に泊まることになった。

翌朝、病院に迎えに行つて勘定をしようとしたら、無料だという。もちろんパスポートなど身分証明書は持つていなければ駄目だが、デンマークでは外国の旅行者が旅行中に怪我をしたり急病にかかった場合、治療費はすべて無料ということであった。消費税が異常に高く(確か二十%であった)、老人・子供の福祉が充実していることは知っていたが、旅行者に対しても国民の税金を使ってサービスしていることになる。

それから十七年後、ニュージールランド旅行中に、今度は女房が指を車のドアに挟んで救急病院で手当てをしてもらったことがあるが、この時も無料であった。

家族旅行

欧州に駐在する最大のメリットは人も言葉も全く異なる様々な国に簡単に旅行ができることだと思う。私も仕事では西欧・東欧の殆どの国に出張した

が、夏休みやクリスマス休暇には家族でイギリス、フランス、スイス、オーストリア、イタリア、スペインなどを旅行した。

小さい子供を連れての家族旅行は、どこか家庭でも同じだと思うが、毎回なんらかのトラブルが起こり苦労することになる。前項のデンマークではやけどであったが、ある年、クリスマス

の時期にパリへ行つた時のことである。パリ空港に着いて荷物引取り所でスーツケースを待っていても一向に出てこない。ついに諦めて、次の便で到着したらホテルに届けてくれるように係員に依頼した。おむつやミルクなどはスーツケースの中に入れていた。女房が子供の面倒を見ようにも、ホテルにチェックインした時刻が遅いのでドラッグストアなどはとくに閉まっており買えず、荷物が到着するのを待つしかなかった。

三時間くらい待っても荷物がつかず、とうとうしびれを切らして空港に電話したら、次の便はすでに到着し荷物は市内の貨物ターミナルの方に発送したという。すぐさまタクシーを呼んで貨物ターミナル(確かアンバリッド廃兵院の地下にあった)へ行つた。事情を告げて荷物の集積所へ案内してもらつたが、沢山の荷物が積んであり、

どこに我家のスーツケースがあるのか全く分からないので、諦めてホテルへ戻つたところ、スーツケースの方が先に着いていた。

結局五時間くらい無駄な時間を費やすことになったが、このとき以降、子供の食べ物、オムツなどその日のうちに必要なものは必ず手荷物の中に入れるようにした。さてパリで三日間過ごして、次の目的地であるスイスのチューリッヒに向かうべく空港に行つたが、天候不良でいつまで待っても飛行機が出ない。結局そのフライトはキャンセルとなり、代わりに車でチューリッヒへ行つてくれという。欧州の冬の天気は変わりやすく、飛行機便の遅れは日常的に起こるが、キャンセルになって汽車で代替された経験はこのときが最初であった。

家族三人だけで一つのコンパートメントに入れてくれ、今度はミルクやオムツまで差し入れてくれた。日本の飛行機会社でもそうだと思うが、幼児と一緒に旅行の場合には非常にサービスが良いことが分かったので、その後は遠慮せず子供連れであることをスチュワーデスに申告するようにした。

娘は四才半までドイツにいたので、イタリア、スペイン、オーストリアなどすべての家族旅行に連れていったが、当然のこととはいえ、小さかったので今は彼女の記憶には全く残っていない。

《ヒマラヤへの道 28》

ガルムツシユ峰 ②①

帰路のキャラバンも4日目になって、もう数日でギルギットの街に着くところまで下りて来た。谷間は開け人が住む民家らしき建物が見えるようになってきた。道なき斜面を下りていくと、一頭の牛が麦の脱穀をしていた。日本では見かけない風景である。土をならし固めた地面に小麦を敷き牛に踏ませて脱穀していたのである。

よっちゃんは、初めて見た時に、なにをしているのかわからなかった。直経が6メートルぐらいの円形の脱穀場といえる中心に棒が立ててあり牛とロープでつながれていて、牛はゆっくり同じところをぐるぐる回りながら麦を足で踏みながら脱穀していた。ずいぶんのんびりした作業である。

その脱穀場はピカピカに磨かれ石ころひとつ無かった。近くに石と土で作られた小さな家があった。

よっちゃんは、家に向かって歩いていき声をかけた。1ヶ月もろくなものも食べていなかったたので、新鮮な食べ物に飢えていたのである。トマト、とうもろこし、じゃがいも…、なんでもいいから欲しかったのである。土と石と木の枝で作った小さな家であった。あたりにひとけ

はない。家の入口と思われるほうに行こうとした時、中から小柄な裸足の老婆が出てきた。

よっちゃんは「何か食べ物はありませんか。トマトか何か」と言った。老婆は最初、突然の訪問者にとまどった様子だったが、よっちゃんの願いがわかったのか家のなかから井の器に入った白い飲み物をもってきた。よっちゃんは、老婆から井を受け取って少し飲んだ。すっぱい味がする。由べえや山猿もきて回し飲みした。由べえが「自家製のヨーグルトだ」と言った。

私は、日本で売っているヨーグルトは嫌いだだったが、老婆の手作りヨーグルトは飲みやすく美味しかった。よっちゃんは、お礼を言ってお金を渡そうとしたが、老婆は受け取らなかった。家の周りを見渡しても野菜畑らしきものはなかった。

他の家が近くにないこの谷間で、これ以上老婆から食べ物ももらったら彼女の食べ物が増える。よっちゃんは、早々に出発することにした。

老婆の暖かい気持ちに感謝しながら、よっちゃんは彼女の年齢を考えた。おそらく見かけほど歳は取っていないだろう。きびしい自然環境が老いをはやめているのだ。しかし、彼女の素朴で純粋な眼をみて、都会で生きる人が失ってしまった大事なものを発見した不思議を考えていた。

よっちゃんは、ギルギットから山奥に入るにしがいい、出会う人の目が澄んだ目に

なっていていき、山奥から街に近づくにしたがって、うさくさい目つきの人が増えてくるように思えたのである。ダルコットの村人が見せた穏やかで素朴な表情と都会に生活する人々の目つきを比べれば、残念ながら都会人は狡猾そうに見えたのは、よっちゃんの偏見だろうか。

ヒマラヤに憧れる人は「山の高さがか未知なる感性を得て、新たな自分を見つけない」そんな想いが強く働き、遠くヒマラヤまで行くのではな

いかと、よっちゃんは思った。1970年代はヒマラヤの山々が次々に登られ、より困難なルートから頂を目指す時代になっていた。よっちゃんの夢も、その流れに乗って登山史に名前を刻むべく浮かれています。たのだが、実際に登山が終わり帰路に着くキャラバンの道中で考えるのは、つまるところ自分のこれからの生き方であった。

山のすばらしさと共に道中で出会う人や風景などが、よっちゃんに対して問いかけてくるように思えた。「よっちゃん！ これから、どうするんだ。仕事も捨てドロップアウトしたうえ、どう生きていくんだ！」

そう思うと、荒涼たる景色が一層よっちゃんの心を悩ましくしていた。

葬儀

四月二十九日に葬儀に参列した。亡くなつのは仕事関係の知人である。ここ数年は疎遠にしていた。七十八歳。死因は肺癌だった。糖尿病も患っていた。死ぬまで止めなかった酒と煙草が命とりになったのだろう。自宅は徳島県の阿南市にある。

故人とは生前、親しくしていたわけではない。ゴールデンウィークの予定が入っていたので参列しようかしまいか迷った。

しかし思い直した。『袖すり合うも他生の縁』

葬儀場に坊さんの読経が流れ、故人を偲び、我が人生を思った。

『人情味のある人だったなあ』
『死んだらしまいだな。精一杯生きて人生を楽しみむしかなない』

帰路は寄り道して徳島駅周辺をぶらついた。ロープウェイで眉山に登って町を一望した。吉野川が印象的だった。

展望台に隣接してモラエス館というのがあったので、入ってみた。モラエスはポルトガル人である。マカオで海軍を退役したあと一八九九(明治三十二年)に神戸の総領事に就任した。そこで福本ヨネと知り合った。ヨネの死後、ヨネの故郷の徳島に移り住んで随筆や紀行文を残し

。滞日期間は三十年。享年七十五歳だった。

『へえ、こんな人が居たんだ』

眉山を降りてインターネットで探した『魚一番・新』という居酒屋に行った。取れ立ての魚と惣菜と美酒。至福のひとつである。

ほろ酔いで故人とモラエスを思った。『故人は阿南で生まれ阿南で死んだ。モラエスはリスボンで生まれ徳島で死んだ。どちらが幸せだったのだろうか』

政局

六月三〇日に、社会保障と税の一体改革法案が衆院で可決され、参院に送られた。参院でも可決されて成立するであろうから、二〇一四年の四月には消費税は八パーセントに引き上げられる。

この消費税増税については、各方面からきびしい批判がある。たとえば、こんなデフレ不況下で増税すれば日本経済が破壊されるとか、それは自滅への道だ、財源は増税しなくても確保できる、という批判だ。それに対して政府は、消費税で補わなければ社会保障の財源がない、この二年間で景気対策、デフレ脱却対策をするから大丈夫だ、行政改革、政治改革もして身を削る努力をするんだと意気込む。それを応援するのは日経、朝日、

読売などの大手メディアである。両論を聞いてみて、税・経済にドシロウトであるが、僕としては、消費税増税を主張する側に与することはどうしてもできない。

増税の背後には財務省がある。菅前総理が、唐突に消費税を一〇%にするといったとき、財務省にしてやられたなと思った。次いで総理になった野田は、財務大臣の経験もあり、言わずもがなである。政権は財務省にコントロールされているようなものだ。

一九九七年、橋本内閣が消費税を五%に引き上げたとき、どういう事態を引き起こしたか。昔も野田も知らないはずはないと思うのだが、震災景気で上向きはじめていた経済が落ち込んで、デフレに陥った。そのデフレ状態で脱却できずに現在にいたっている。あの政策通といわれた橋本龍太郎でさえ大蔵官僚にしてやられた。橋本はたしか増税の間違いを認めたんじゃないか。つただろうか。

あのときより現在のほうが経済状態がよくないにもかかわらず、景気に直結する増税をしようというわけだ。野田はいった、増税することによって景気刺激なって経済を活性化するようなことを。バツカじゃなかるうか。世界のどこかにそんな例があったら、教えてほしい。増税なんてものは景気がよ

くて少々過熱気味のときにやるもんだと俺なんか思うのだが。

社会保障の財源がない、だから増税だというのが、その前に将来のビジョンを示して国民的な議論に広めてほしい。デンマークのような全額税負担でいくのか、ドイツやフランスのように中負担でいくのか、アメリカのような低負担がいいのか。

もうひとつ財源の問題。日本は借金まみれで、GDPの2倍ある、こんな借金を将来の子どもたちに負担させるわけにはいかない、と政府や財務省はいう。その借金は国債でまかなわれている。国債は英語では **government bond** とい

う。つまり政府が資金調達するために発行する債券で、債務者は政府ということになる。じゃあ債権者は誰かといえ、日本国債の95%は国内貯蓄でまかなわれているので、国民ということになる。債権者の国民がなんで借金を返さなければいけないんだ。返すどころか、将来の子どもたちは政府から返してもらわなくてははいけないわけだ。これが財務省のたましのロジック。ギリシャのようになるといふだましもある。

消費税増税の法案に反対して小沢一郎は民主党を離党した。もう勝手にやれという感じだ。小沢はもともと増税論者だから消費税そのものに反対しているわけでもない。エネルギー問題でも、

原発は過渡的エネルギーといっていたが、実際は原発を推進してきたではないか。きちんと説明しろといいたいが、ないだろう。小沢には期待できない。(猿)

■読者からの手紙

鳥取県 中原節子

風薫る季節ですが、天の乱調、世相の不穏、時の風雲がいつまでも気がかりです。藤田氏がわざわざ私に送って下さった、エッセイ集「夜道」と芥川だよりNo.52、No.67を拝読させて頂く榮に浴しまして大変嬉しく感謝しております。

さすがですね、磨きぬかれた、その「ドキッ」とする感性をいつもお心に秘め持っていていらっしゃるんですね。よくわかります。

昔の農家のことなど思い出しています。とても明るく楽しく、気合の入った立派な文章表現に感動し敬服しております。何回も読みかえす楽しさを持ちました。弟や友にも読ませたいと考えております。私は高齢の上、脳の働きも鈍くて、粗雑で表現の仕方がどうも出来ませんが、とに角うれしく喜んでおります。心から御礼を申し上げます。益々のご精進とご発展を念じております。

合掌